

【彙報】（平成十七年四月～平成十八年三月）

◎平成十七年度埼玉大学国語教育学会大会 総会

○平成十七年十一月十二日（土） 於埼玉大学

◇研究発表

- 一 記紀・豊玉ヒメ伝承の生成
神田 裕子（埼玉大学大学院生）
- 二 記・弟橘比売命入水伝承考
松浦 大翼（埼玉大学大学院生）
- 三 『播磨国風土記』の石（龍）比賣命
宇賀神 裕（埼玉大学大学院生）
- 四 学習対話を発展させた授業実践の分析
高崎 智乃（埼玉大学大学院生）
- 五 大伴田村大嬢歌の表現性
寺田 裕美（埼玉大学大学院生）
- 六 『呼子と口笛』論
柳沢有一郎（埼玉大学大学院生）

◇シンポジウム

- テーマ：メディア・リテラシーと国語教育
シンポジスト：池田 邦彦
（入間市立東町小学校教諭）
中村 純子
（川崎市立麻生中学校教諭）
岩永 正史（山梨大学教授）
司会………竹長 吉正（埼玉大学教授）

◇総会

◎平成十七年度例会

○平成十八年二月十八日（土） 於埼玉大学

◇長期研修生研究発表

- 一 確かな国語力を育てる学習指導の研究
— 小学校国語科で育てたいメディア・リテラシー—
池田 邦彦（入間市立東町小学校教諭）
- 二 国語科における確かな学力の向上を目指した学習指導
— 伝え合う力を高めるための学習指導の工夫・改善—
江利川哲也（加須市立大越小学校教諭）

◇修士論文発表

- 一 思いをよせ合い、心をたくましくする「話すこと・聞くこと」の研究
— 対話感覚を活かして「生きてはたらく力」を—
高崎 智乃（埼玉大学大学院生）
- 二 『日本書紀』日本武尊白鳥稜伝承考
さいたま市立谷田小学校教諭
- 三 地方における朝廷祭祀—播磨国風土記揖保郡意此川伝承
神田 裕子（埼玉大学大学院生）
- 四 『播磨国風土記』の「石龍比売命」と「石比売」

- 五 『万葉集』大伴田村大嬢歌の表現性
宇賀神 裕（埼玉大学大学院生）
- 六 石川啄木晩年の文学
寺田 裕美（埼玉大学大学院生）
- 七 現代日本語における女性語の研究
— 終助詞を中心に—
柳沢有一郎（埼玉大学大学院生）
ハタン アン
（立命館大学国際課専門契約職員）

◇卒業研究発表

- 一 古事記系譜論
井上 隼人（埼玉大学四年次生）
- 二 村上春樹『風の歌を聴け』における反・小説性の考察
藤野 浩行（埼玉大学四年次生）
- 三 作文産出過程に着目した作文指導方法の開発
宮内佐和子（埼玉大学四年次生）
- 四 『ハイジ』作品論
山内 絢子（埼玉大学四年次生）

◎平成十七年度修士論文 卒業論文題目

○修士論文題目

平成十七年度修了生(平成十八年三月修了)

思いをよせ合い、心をたくましくする

「話すこと・聞くこと」の研究

—対話感覚を活かして「生きてはたらく力」を—

『日本書紀』日本武尊白鳥稜伝承考

地方における朝廷祭祀

—播磨国風土記揖保郡意此川伝承

『播磨国風土記』の「石龍比売命」と「石比売」

『万葉集』大伴田村大嬢歌の表現性

石川啄木晩年の文学

現代日本語における女性語の研究

—終助詞を中心に—

○卒業論文題目

山田詠美論

国語教育における教師の読み方について

伊坂幸太郎の作品における読後感

岩手の方言について

古事記系譜論

新井素子作品における

近代家族的背景とその女性像

神沢利子研究

千利休の「わび」

象形文字から考える漢字

芥川龍之介の見た「今昔物語」の世界

タイプアップを考える

王さまシリーズ研究

萩原規子の作品研究

文学教材における分析批評の研究

綿矢りさ・金原ひとみについての研究

「ゲド戦記」作品論

作文教育における構想指導

「捜神記」の研究 —鬼を中心に—

射経の研究

伊藤 沙樹

井上 隼人

海老原綾美

大坪 政徳

大野まゆみ

小山 司

川添 佑紀

川原 由美

城戸美知世

木野さやか

久保 明香

小杉山美樹

小峯 和恵

小柳 晴美

清水英津子

清水 政範

言語の地域性について

—じやんけんの掛け声の方言差から—

那須正幹研究

オタリヤ考

谷崎潤一郎文学における語りの構造

柏葉幸子研究

人はなぜ泣くのか、どうして涙が流れるのか

文学の中にみとれる「恐怖」

村上龍のクロスメディア論

灰谷健次郎 —「天の瞳」論—

陳述副詞についての研究

脳から見た「手書き文字」の研究

漫画のオノマトペ

戯曲における話し言葉

宮崎駿と宮沢賢治に通じるもの

効果的な読書指導について

下山田遼子

清藤 紫織

高橋 尚

中馬 亜衣

堤 春奈

長瀬 そら

成田 耕祐

野池 綾

野呂 有沙

長谷川 靖

秦 大介

羽根田沙樹

深沢 雅子

福田日陽里

福留あゆみ

村上春樹「風の歌を聴け」
における反・小説性の考察

藤野 浩行

児童たちとよい本の出会いの場となる読書活動

船居久並子

古典教育の意義―古典化の過程に着目して―

細矢みゆき

笑いの教育 ―心の豊かな人間を育てる―

松本 顕記

作文産出過程に着目した作文指導方法の開発

宮内佐和子

デュルケム教育学批判

森川 大地

「ハイジ」 作品論

山内 絢子

若者言葉の研究

山口 幸希

「風立ちぬ」 論

山田 空

現代日本における

山田 大輔

流行音楽のジャンル形成について

吉野 竜一

鬼とのつきあい方

小田 純平

く仏教説話と民間伝承を手がかりに

渡部 弘嗣

広島弁について

◎埼玉大学国語教育学会研究奨励賞受賞論文の 紹介と講評

平成十一年度より、研究・教育の活性化のため、学生会員の作成した卒業論文の中から特に優秀と認められたものを表彰しています。第七回にあたる平成十七年度は、七点の論文に研究奨励賞（賞状と副賞）が贈られました。

以下は、受賞した論文の紹介と講評です。

「国語教育における教師の読み方について」

安里あかね

この研究は、著者の教育実習で感じた素朴な疑問から出発している。それは、道徳の授業での自分の読み方が国語の授業での読み方とかなり違っていたのだが、それは何故だったのかという疑問である。そこから著者は、その背後に想定される教育意識を探り出し、その上で教師の読み方についての意識を再検討するという課題を設定したのである。その結果、従来国語の授業において一般的であった「単調読み」は、ホム・キンデ・アウス（子どもから）という立場から見ると、「表現読み」に転換していく必要があるという結論を得るに至っている。教師の行動をその意図にさかのぼって理解し、それに変わる新しい根拠とその具像を提示し得ている点で、本研究は、理論的であるとともにきわめて実践的なものとなっており、その点が高く評価された。

（文責 戸田 功）

「文章産出過程に着目した作文指導方法の開発」

宮内佐和子

本研究は、児童が作文における見方・考え方を獲得することを目指し、「相手意識・目的意識」を重点に置いた作文指導の方法を提案したものである。具体的には、書き手の文章産出過程の仕組みや順序を考慮したうえで、目標の分析、設定や構想、自己評価、相互評価の活動において、作文の見方・考え方をどのように指導するのか、その方法を検討開発し、提案している。新たに「文章産出過程モデル」を作成した上で、それに基づいた指導方法を工夫し、二つの実験によってその有効性と遺された課題を実証的に解明しており、そこには周到な準備と粘り強い作業による厳密さの追求がみられ、その点が高く評価された。

（文責 戸田 功）

「古事記系譜考」

井上 隼人

皇統譜を決定するため、古事記は編まれた。しかし、その中には名前を明かさなない皇妃（「またの妾」）がいる。本論文では、古事記が「またの妾」とあえて名前を伏せた理由を問う。

日本書紀との比較から、当該系譜は南九州地方と関わることを突き止める。そしてその地域は、稲作の生産率が低く、朝廷政策からすれば、反朝廷的な位置づけをされていたとする。このことが古事記系譜で「またの妾」と記された理由だと主張する。

系譜を綿密に調査しつつも、系譜論の範疇にと

どまらない点に面白みがある。大胆な仮説ではあるが、古事記の編纂思想とも関わる視野を持っているあたり、説得力のある論であった。

(文責 飯泉 健司)

「村上春樹『風の歌を聴け』を読むということ

〜風の中で、風がなる、風がなる」

藤野 浩行

本論文は、〈反小説性〉という観点から村上春樹『風の歌を聴け』を分析し、テクストとしての決定可能性やそのメタフィクション的性質を明らかにしている。記号、テクスト、読者、語り手、ストーリーとプロット等の諸概念に原理的な考察を加えることで、小説そのものを根本的に捉え直すという困難な課題を引き受けており、かつ『風の歌を聴け』の小説としての新たな可能性を提起している。

(文責 山元 良)

「柏葉幸子研究」

堤 春奈

柏葉幸子という現代児童文学作家の特徴をよくとらえ、かつ、作品分析にもすぐれた点があった。また、読書新聞など柏葉作品の紹介をめざす教育実践のアイデアにすぐれたところがあった。

(文責 竹長 吉正)

「宮崎駿と宮沢賢治に通じるもの」

福田日陽里

「通じるもの」と研究の視点を限定したため、論じやすかった反面、両者の相違など深く掘り下げることができなかった。しかし、宮崎駿作品の解説にはなかなかシャープなところがあり、出色の宮崎論といえる。

(文責 竹長 吉正)

「『ハイジ』作品論」

山内 絢子

『ハイジ』をトータルに論じるにはいささか力量不足である。多少、つまみ食いになったが、『ハイジ』のアニメの読み込み、『ハイジ』各種絵本の比較など、この人ならではのところが光っていた。

(文責 竹長 吉正)

編集後記

国語教育論叢第10号の発行が、何とか年度内に間に合いました。本号では、学会シンポジウムの採録の他、多数の投稿論文を掲載することができました。会員諸氏には、今後とも活発な御投稿をお願いします。

(I)